

# 上映映画解説

1953, 8.29 ~ 10.4

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 11

## フィルム・ライブラリーについて

国立近代美術館では、設立以来同館内に定員約百名の映写室をもつフィルム・ライブラリーを設け、内外古今の優秀映画の収集保存ならびにその活用について努力いたしております。

今回は「現代写真展」の期間中、種々の分野の短篇映画の代表的作品として、次の映画の中適宜撰択して、毎日二回上映いたします。

### つつが虫 二巻

監督 三井芸術プロ作品  
製作 文部省大学術局  
演出 三井 高 孟  
撮影 太田 仁 吉  
鈴木 喜代治

これは文部省学術映画シリーズの一篇として製作されたもので、科学者の研究の過程と成果を記録し紹介する学術映画のすぐれた一例である。

東大伝染病研究所佐々研究室ではかねてから恐い風土病の因をなす「つつが虫」についての研究を行っていたが、昭和二十七年にいたつて主として三浦昭子氏の丹念な努力（同氏のすがたは画に見られる）にもとづいて実験室内におけるその飼育に成功し、ここに始めて「つつが虫」の生態をのこりなくはあくしその發育史を完全に解明することができるようになった。この映画はその貴重な業績を中心として構成されたものである。

つつが虫病は特異の風土病であるだけにそれが現実の問題となつていない地方ではやや切実感がうすくなるかもしれないが、しかし恐い害虫とけんめいにとりくんでいる科学者のかくれた苦心と努力、それによつてもたらされる社会生活の改善と向上に對して、人びとの目を意義深く開かせるといふ一般化された訴えかけの点では、この映画の効果と役割はかなり大きなものをもつていふことができる。そして昔から数多くの理科映画を手がけ、戦後も「あげは蝶」、「稲の一生」などの秀作を世に問うている演出者太田仁吉氏のオーソドックスな手法が、この映画を成功させた一つの大きな理由になつていふことも見のがせない。要するに「つつが虫」は、人類の幸福のためにた

かいつづける科学者の意義深い精進のすがたを、じつくりと正攻法で記録し表現する科学映画の典型的なきかたが、限定された題材を越えての一般的感銘を生みだしようといふことの一つの好例「霜の花」はも一つのそれである。この点本映画と「或る日の干潟」とはまさしく対照的存在であつて、両者の比較検討は興味深いものを浮かびださせることとなるであろう。

### 或る日の干潟

二巻

理研映画株式会社作品  
演出 下村 兼 史  
撮影 佐野 時 雄

この映画は、現実の生物の生態をあつかひながらそれを客観的に記録するだけでなく、作者の主観にもとづく画面の自由な編集によつて強く個性的な方向づけがほどこされた世界をそこにくりひろげる、という特異な記録映画のありかたを典型的に提示するものとして、またそうしたいきかたの一つのすぐれた先駆者としてここにあげられている。

ここに描きだされるのはいわば自然界のドラマであつて、作者はそのドラマを組みたてた材料としてさまざまな生物の生態をとらえているということができる。もちろん生物たちの「演技」は文字であり「演出」されたものではなく「盗み撮り」その他の巧妙なくふうと絶大な忍耐力によつてはじめて記録しえたものであるが、作者の関心はあきらかにそれらが観客の感情に訴えかけるものの上におかれている。これはまさにドキュメントによるフィクションの世界といつてもさしつかえないであろう。この種の映画が、教育性と娯楽性を総合したのとして一般にこのよばれる理由はなによりもこの点にあり、そしてまた突つこんだ検討を必要とする問題点もまさしくそこに求められる。作者下村兼史氏は鳥の研究家であるとともに個性の強い鳥の記録映画作家であつて、すでに十数年前から「水鳥の生活」を出発点として、本映画及び「富士山麓の鳥」、「慈悲心鳥」などの注目すべき作品を発表しており、戦後はさらに「ちどり」、「鶴と子供たち」、「こんこん鳥物語（文部大臣賞受賞）」、「雀の生活」や「或る日の沼地」、「鶴の来る村」（鳥製作中）など物語的要素をはつきりとり入れたものをまじえてかなりの

数にのぼる作品を出している。これらのほとんどすべてをつらぬいているが先にあげた特異なほらといきかたであつて、この意味で下村氏の作品は記録映画に関心をもつものの特別の注目にあたいたといわなければならぬ。

### 稲の一生 二巻

日本映画社作品  
製作 石 林 省  
製作担当 石 本 統 吉  
演出 太田 仁 吉  
撮影 鈴木 喜代治

この作品は技術指導のための映画が一般的なアツピルをもつことができた典型的な場合である。技術指導における映画教材の役割はきわめて大きくまた多方面にわたつていゝが、これを大別すると、対象となる存在のしくみを理解させることに重点をおくものと、具体的な個々の技術面をとりあげるものとの二つに分かれるであろう。

「稲の一生」はあきらかに前者に属する作品で、そこには種子の選別から結実に至るまでの稲作の過程があつたかたわっているが、その主たるねらいは真にみのり多い稲作を実現するための基本條件として稲の生態をしつかりつかませるといふ点に存している。稲もまた生きていゝものであつてその生命力を保護し助成してやることがなによりも必要である。そのためには肉眼による観察だけでは不十分で微速度撮影を活用しながら稲の生理と活動のすがたをはつきりとならえさせていゝこうし、これが本映画をふとくつらぬく論点をなしている。そしてこのよふな当事者の心がまえが製作の直接目標となつた全国の農民に深い感銘を投げかけるとともに、一般の人びとも植物の神秘、広くいつて自然界にみえざる生命の神秘を強く訴えかけて、二十五六年度の文部大臣賞を始めとする各方面の原因であるよふに考えられる。こうしたなりゆきから「稲の一生」はすぐれた「文化映画」としてほめたたえられることになつたのであるが、しかしその本来の性格は農林省の企画による農業技術指導のための「教材映画」であることを見うしなうべきでない。

## 霜の花 二巻

日本映画社作品

製作 中谷 宇吉郎  
撮影 吉野 馨 二

学術映画の典型的なものとしてとりあげたこの「霜の花」は、低温科学の分野で貴重な業績のかずかずをあげておられる、北大教授中谷宇吉郎氏の研究の一部をなす作品であつて、戦時につくられた「雪の結晶」(東宝文化映画部作品)の姉妹篇といふことができる。完成は二十三年、ノルウェーのオスローで開かれた国際学術会議に出品されて絶大な感銘を与え、また同年度の朝日文化賞が日本映画社教育映画部に授与される最大の理由の一つをなしている。

この作品がすぐれた学術映画となりえたのは、もちろん中谷教授を中心とする北大低温科学研究所の人びとのりつばな科学的業績とゆきとどいた指導、協力によるものであるが、それとともに、戦後の苦しい悪条件とたたかひながら、零下十五度の低温実験室の中で二か月がんばりとおした映画技術者の良心的努力もたたえられねばならない。これはまさに学者と映画人との協力が最も美しく具体化された場合の一つである。この「霜の花」は、映画が学術研究の上にとどのよう

に有用なものであるかを意義深く実証しているばかりでなく、学術研究の過程と成果をともに記録した作品が、科学及び科学者への関心と共感とをどのようにもりあげうるものであるかのがやかしい実例ともなつてゐる。そこにくりひろげられる科学の世界は、ほとんど芸術的感銘にも近いものを見る人の心によびおこすのである。

## 雲界縦走

### 燕岳から槍が岳へ 二巻

塚本閣治 作品

槍が岳は標高三一七八・五米、北アルプスの嶺中央に信濃川神通川の水を分けて聳つ本土第四の高峯である。

文字通り槍の穂先のように鋭い峯頭は、北鎌尾根を始めとして四方に岩稜を派出して天空を貫く様は壮観

の極みである。この日本のマター・ホーンを目指して集中する登山路の内でも最も人気のあるのが燕岳から大天井西岳を経て東鎌尾を辿るもので、アルプス銀座と呼ばれる程一般に親しまれ又魅力と変化に富むコースである。

この映画は山稜にお花畑の妍を競う七月下旬中房温泉を起点として、最後は上高地に下る登山記録の中に、プロクセンのお化けと呼ばれる奇現象や小槍の岩壁登攀のスリルなどを織り込んで北アルプスの魅力を展開する。

(一六ミリ、カラーフィルム)

### 尾瀬を巡る旅 二巻

塚本閣治 作品

只見川の水電問題で世の視聽を集めている尾瀬が原は、群馬、福島、新潟の縣境に展開する日本唯一の高湿原で是を囲む黒々とした寒帯林と明暗相交る原始風景の美しさは、北アルプスの男性的綜合美に対して是は女性美の極致という過言ではない。

この映画はニツコウキスゲの大群落が原を黄色に彩る七月下旬尾瀬の最も美しい時期を選んで代表的なコースである三平峠から尾瀬沼を訪れ尾瀬を創造した盟主、隆岳に登り、最後は南会津の秘郷槍枝岐に平家の昔をしのぶ一週間の山旅の記録である。

(一六ミリ、カラーフィルム)

### The Photographer

この映画は写真の持つ文化的芸術的価値を示すことを目的として、一九四八年アメリカ国務省で作られた教育映画である。現代アメリカの代表的写真家エドワード・ウェストンの制作活動と作品を描きながら、主題の選定、構図、引き伸ばしなど色々な角度から写真を説明している。

(一六ミリ、四巻)

(なお、このプリントはアメリカ大使館の好意で、本國から提供されたものである。)

なお、九月中毎週水曜日にサイレント時代の文化映画の代表作として、ドイツ・ウファ映画「美と力への道」(一九二五年、一〇巻)を上映します。